

まで勤務をしました。

もし入営するときに退職していたら、新規採用となつて勤続年数も随分損をしていたと思います。思い出せば、河南作戦も随分辛かった、作戦らしい作戦でした。老河口作戦も大変で、特に後期の撤退も大変でしたが、私は腎臓病で後送され助かったのです。復員後も幸いでしたし、現在も健康、運の分かれ目は生死の分かれ目です。

昭和十三年我が連隊の編成以来の戦没者は一、四一人ということですが、終戦後戦傷者四一九人が未帰隊者であり、そのうち多数の戦没者があつたと推測されます。また、上海終結時の部隊兵員は二、六二八人で、その中の一人として私がいるのです。更に復員後四十九年、多くの物故者がいることを思うにつけ、私は幸せであります。

「興亜植樹」部隊

千葉県 古川 文吉

―機動歩兵連隊という変わった部隊です―

はい。私は昭和十六年徴集で第一乙でしたが、現役入隊です。騎兵十四連隊要員として昭和十七年一月大阪難波別院という寺に集合して、兵器一式をもらつて広島宇品で乗船。着いた所が蒙古の砂漠の真ん中で包頭という街でした。

農家の長男として生まれ、両親と妹三人の六人家族です。農学校を出て、青年学校に行き、軍事教練を受け、昭和十六年には宮城（現皇居）前広場で青年訓練十五周年記念行事に代表に選ばれ、天皇陛下の御親閲を受けたことがあります。

家は米作中心の農家ですが、役牛がおりましたので、動物の扱いには馴れており、馬の世話も苦になりませんでした。両親も元気で、長男を兵隊に出すのは心配

だったと思いますが、当時の日本は国を挙げて戦時一色でしたから当然という感じでした。

連隊の原隊は習志野ですが、満州ハイラルから二年ほど前に蒙古に移駐、本部は包頭の北方にある安北にあり、私の第二中隊は包頭の南門にあり警備についていました。

中隊に配属されて意外だったのは騎兵なのに馬が一つもないんです。馬の取扱いは難儀なことで覚悟はしてきましたが、その馬がないので正直言って「ホッ」としました。馬の代わりに中古の貨物自動車待ち受けていた。車の運転は全然知らない。エライことだと思ったら運転は別の兵隊がやるから心配ないと言われ、一期の検閲は専ら歩兵の戦闘訓練ばかりを「サラチ」の十三連隊で仕込まれました。車の操縦は、あとで伍動上等兵になってから教育を受けました。一個分隊は一車両、軽機一、擲弾筒一、小銃十の武器編成です。

最初の出動は、太原の近くの閔西の歩兵部隊に第二中隊全部で討伐の応援に行きました。万里の長城の一

番奥になる所で砂漠でした。相手は共産八路军です。自動車部隊ですから、食糧弾薬一切自動車で積んでの行動で、他の部隊からは重宝がられ出動は再々でした。そのうち昭和十七年十二月になると、騎兵第十三、十四連隊は解散して戦車第三師団の新設に伴う機動歩兵第三連隊に編成替えとなりました。師団長に西原一策中将がなりました。連隊長は吉松喜三大佐、大隊長は山野辺少佐です。

新しい部隊になったら車両が新品になりました。今までは戦利品の米製の中古オンボロ車だったので、トヨタ、ニッサンの日本車になり、指揮班用には四輪駆動のジープ（日本相模工場製）、キャタピラ付きの兵員装甲車などの新車ばかりになりましたので皆大喜びでした。

昭和十九年一月、師団長が山路英男中将に代わり、三月に京漢線打通のため一号作戦が発令され、部隊は中古車両を残して一路黄河渡河のため南進を始めたのです。

三月包頭出發、石家莊に集結、四月末に黄河渡河作

戦に入り、工兵隊の作った鉄舟橋を渡り霸王城を突破し峽県を攻撃したとき、中隊長が敵の投げた手榴弾の破片で臀部に負傷しましたが、陸士出身だけに入院を拒み、行動を共にしたので、当番の私は仕方なく背中に負つたりして介抱しました。五月十日洛陽攻撃の際、西門から突入した中隊は敵を駆逐しましたので宿営したところが、城内の地下壕に潜んでいた敵が夜間に屋根伝ひに来て屋根瓦をめくり、穴から手榴弾を投げ込むと同時に火を放つて逆襲してきました。中隊長代理木村少尉以下十人戦死、負傷者三十人の損害を出し、死体収容の余裕なく一時後退の止むなきに至りました。五月二十二日砲兵の応援を得て第二回の総攻撃をかけ、西北角の駅付近から再び突入、激戦の末、ついに洛陽を攻略したのです。その後は洛陽近辺の葉県で警備にあたり二十年三月まで駐留しました。

吉松連隊長は植樹を部下に奨励し、行く先々で苗木を作り、緑を植えることに熱心でした。作戦中は車両部隊の特権で汗を流しながら疲れ切つて歩く徒歩部隊に比べれば天国でした。行軍中の歩兵にタバコをやつ

て喜ばれたこともありました。

食糧はコトリアンが支給されましたが、白米があるので食べずにすませました。車がぬかるみにはまる砂利代りに使つたこともありました。

二十年四月に入り老河口作戦が始まり、兵隊は車を降りて徒歩になり、淅川、李官橋、馬頭鎮と山岳戦で苦労しました。山の上から攻撃を受け、米空軍の機銃掃射にあい、昼間歩けないので夜間行軍を連続十四日間、徒歩行軍は苦しかった。馬頭鎮では中隊が二キロ前方に四カ所の分哨を出していたとき、昼間部落から一人の老婆が歩哨線を抜けて山の方に歩いて行った。老婆だからと歩哨が気をゆるして見逃したために、その夜四カ所の分哨が一斉に夜襲を受けたことがありました。少しの油断もならぬと作戦要務令の大切さが痛感させられました。

七月中旬、満州の風雲危うしとのことで北進を命ぜられ、老河口行きを変更し、許昌に向けて東北方に転進する途中、ある川に差しかかり戦車を乗せた舟が沈没しましたので引き揚げ作業中、他の部隊の将校から

「戦争が終わったと言うのに引き揚げ作業なんか無駄だ」と言われて初めて戦争が終わったことを知りました。だれもが負けたとは思っていませんでしたので驚きました。

沈んだ戦車は引き揚げて許昌に到着、正式に終戦命令を受けたが武装解除受けることなく十月北京に到着、豊台飛行場に集結した居留民を保護する任務に就き、十一月末に「ターク」で米軍フリゲート艦に乗るまで、武器は持っていました。

昭和二十年十二月四日に佐世保上陸、十七円もらって六日の深夜懐かしの我が家に復員しました。全く連絡なしで帰ったので親や妹は驚き喜んで迎えてくれました。

農業は冬で農閑期でしたが、海苔の漁業権を持っていきますので早速戦力になり働きました。都会では食糧不足で大変でしたが、我が家は農家なので米の心配はありませんでした。

中隊長は川崎に復員したので、間もなく買い出しを兼ねて訪ねて来られました。戦友も買い出しに来られ

たので、できるだけの面倒は見させていただきました。

―次に興亜植樹部隊の話をしてください―

吉松喜三連隊長の信念による日華親善の植樹は、緑に親しみ樹を増すことにより、兵員各自にも心のなごやかさが得られ、蒙古砂漠の樹木の少ない所に、沢山の苗木を植え住民にも喜ばれる一石二鳥の名案でした。そして苗木を作るのは挿し木を主とし、各中隊ごとに宮庭などに挿し木の畑を作り、毎朝晩、水をやって苗木を作り移植をしていました。

苗木は各大隊ごとに五〇万本植え抜くことを決め、この目標達成に努力が払われました。第一大隊では「サラチ」郊外の駅近くに、この五〇万本達成を記念して「興亜植樹の森」記念の石碑を建て、「安北」で行った植樹も戦後、安北人民政府委員会からの便りによると、「あなた方が植えたポプラが六メートルの大木になりました」との知らせがありました。

包頭では興亜植樹公園を造り、内地の桜の苗木一万本と共に樹を植え、ここに富士山を作り池をめぐるし

魚を放ち、兵隊と現地人が糸を垂れ釣を楽しんで五族協和の実を結んだのでした。

また、この植樹を意義づけるため「興亜植樹の歌」を作り、部隊歌として軍歌と共に歌い、連隊の団結をこの植樹に託したのでした。

私も吉松部隊長から植樹の賞状を頂きました。吉松さんは復員後、靖国神社の境内に桜、椿、銀杏などの植樹をし苗木の配布をされていました。吉松さんは九十歳で亡くなりましたが、現在も鳥居を入った傍らで苗木の配布をやっています。

戦後、包頭は日本軍撤退後、国府軍の手中にあったのですが中共軍の二度にわたる攻撃で解放されました。この戦火で一部の樹木が焼けたり防御用に使われましたが六メートル余りのポプラの並木は今も残っているそうです。